# 博士論文執筆経験談

平成17年３月修了生　**舞田　敏彦**
（武蔵野大学非常勤講師）

ここで申し上げるのは、ごく平凡な一人の院生の経験談です。私は、博士論文の完成に４年を要しました。６つの観点から、在学生活を再構成してみます。

**１）生計面**

研究も大事ですが、まずは食わねばなりません。私は、在学中、TAやRAを除き、アルバイトや非常勤はしませんでした。フィールド調査の経費や６つの学会の会費など、出費はつきませんでしたが、奨学金や授業料免除の特典にあずかり、何とかしのぎました。しかし、４年になり、これらの特権が根こそぎ剥奪されるや、直ちに困窮生活に陥りました。この年は、博士論文執筆の重荷も加わり、その苦しさはひとしおでした。博士課程の場合、留年も珍しくないことから、何らかの配慮がほしい、と思いました。

**２）日々の勉強**

在学中は、よく大学の図書館で勉強しました。２階の隅に指定席を作り、そこで本を読んだり、仏語文献を訳したりしていました。私は、基本的に一人で勉強するタイプでした。仲間内の研究会に参加することはありませんでした。今から思うに、少しは研究会の類に出ればよかったと反省します。一人で勉強できるのは、相当意志の強い人です。人間は一人でいると惰性に流れるものだと確信します。私もそうでした。私の副指導教官が、「凡人は揉まれないといけない」とおっしゃいました。なるほどと思います。

**３）論文指導**

主指導教官の陣内先生をはじめ、３人の指導教官の研究室には頻繁に出入りしました。１年次は毎週、その後も定期的に通い詰めました。指導教官と疎遠にならない、顔はきちんと合わせるという形式だけは、４年間頑なに貫きました。もっとも、面会の度に衝突し、印象を悪くした面が強いですが。しかし、私のことを嫌というほど先生方に知っていただけました。博士論文の審査会の後、ある先生が、「君のことは知り尽くしているので、論文の審査がしやすかった」とおっしゃいました。先生方と深く関わって損はありません。

**４）研究の進行速度**

１年次は研究の意義の吟味、先行研究の検討、２年次はフィールド調査、学会報告、学会誌に論文投稿、３年次は研究の総括と博士論文執筆、こう進めばいいのですが、そうはいかないもの。私も然り。１年次は土台固めの時期ですが、私はそれをせず、目的もはっきりしない統計データの解析やフィールド調査をしました。２年次も低空飛行でした。３年になって、上昇の兆しがみえました。博士論文の中核部分を構成するレフリー付き論文が受理されたのは、３年次になってからです。焦っても、百害あって一利なしです。

**５）サブテーマ**

私は、１年次の７月頃から、現在の非常勤先の武蔵野大学に出入りするようになりました。そこで、学部時代の指導教官と、社会病理学（犯罪、自殺）の共同研究をしました。その中で、高度な統計解析の手法（重回帰分析、数量化理論など）も学習することになり、結果的に、博士論文の執筆に寄与しました。サブテーマを持つことはいいことだと思います。本テーマが行き詰まった時の隠れ蓑？になり、視点を変えて、再びそれに挑む契機にもなります。また、自分の研究をより広い文脈に引き上げるのにもいいでしょう。

**６）投稿論文**

博士論文提出には、レフリー付き論文が２本要求されます。誰もが、この条件を早くクリアしたいと思っています。思い込みの激しい私は、とくにそうでした。陣内先生の制止も聞かず、１・２年次の間に、『学校教育学研究論集』に論文（もどき）を３回投稿し、全て不採択を食らいました。この間に学会誌への投稿も２回ほどリジェクトされました。実に惨めな思いをしました。博士課程を退学しようかと本気で思いました。しかし、ここまでの失敗をしたら、自分の至らなさが分かってきます。論文を出す前に、先生に読んでいただくこと、自分で点検するなら、少し間をおいて、頭を冷ましてから草稿を再読すること、云々。先生方に諭され、このことを学習した私は、３年次になってようやく、３つのレフリー雑誌に論文を載せることができました。その後、４年次は、ひたすら博士論文を書き上げることに邁進、草稿は８月中に仕上げ、11月に予備審査、12月に提出という段取りになりました。

以上、私の体験を申し上げました。凡人とは程遠い模範生ぶりを紹介したとは思いません。「こんな奴でも書けたんだ」という希望の糧になさってください。焦らず、失敗にめげず、当たり前のことを根気強くこなしていれば、必ず目標にたどり着けます。皆様の研究の今後のご発展をお祈りいたします。